

1972年8月, カナダ Montreal で開催される第24回国際地質学会議の期間中の1日, 国際地質学会議(IGC), 国際鉱物学連合(IMA), 及び国際地学連合(IUGS)の共催の下に, シンポジウム“岩石鉱物の高温高压研究における最近の進歩”がもたれます。その議長は八木健三, A. D. Edgar 教授(加)の両名で, 主なテーマはつぎのごとくであります。

1. 無水及び含水・CO₂ 条件下の岩石の溶融
2. 超基性岩とその造岩鉱物における反応と相転位
3. アルミノ珪酸塩鉱物の反応
4. 酸素セル (Oxygen cell) 実験法

すでに若干の招待講演が内定していますが, その外に上記またはもっと一般的なテーマについての論文を募集いたしております。参加希望者は論文題目と抄録(英文, 250語以内)を1971年11月1日までに下記あて送付されるようお願いいたします。なお採否は議長に一任されております。

General Secretary, 24th International Geological Congress, 601 Booth Street, Ottawa 4, Ontario, Canada

(八木健三記)

新 会 員 (1971. 6. 13~1971. 8. 14)

(氏名)	(勤務先)	(卒業学校)
梶原 良道	東教大理地鉱	東 大 (1968)**
根建 心具	東北大理岩鉱	東北大理 (1967)
吉岡 修	東大大学院	
松田 敏彦	岡山大理大学院	岡 山 大 (1971)
佐藤 義夫	東海大海洋大学院	東 海 大 (1960)
相沢 省一	群馬大工大学院	群 馬 大 工 (1971)
中西 孝	金沢大理	金 沢 大 (1969)**
佐竹 研一	名大理大学院	名 大 (1969)
野田 徹郎	九大温研	九 大 (1968)
大森 昌衛	東教大理地鉱	東京文理大 (1944)
下川 利成	東京理大大学院	東京理大 (1971)
宮崎 章	東大理化大学院	東 大 (1969)*
斎藤 修	北大水産大学院	北 大*
福田 一義	北大大学院	

調枝 勝幸	広島県衛生研	島 根 大 (1967)
中村 裕二	東大理大学院	東 大 工 (1971)*
カッコ内は大学修了年次		
* 大学院修士課程修了年次		
** 大学院博士課程修了年次		

退 会 者

(71/6/14) D. S. Evans

学会事務所 東京都杉並区高円寺北 4-35-8
気象研究所 地球化学研究部
ニ ュ ー ス 東京世田谷区深沢 2-1-1
発 行 所 東京都立大学理学部化学教室
(編集担当) 半谷高久・石渡良志

第2回 水質汚濁研究に関するシンポジウム

1. 期 日 昭和46年10月9日(土), 9:30~14:30
2. 場 所 日本都市センターホール
(東京都千代田区平河町)
3. 主 催 (社)日本下水道協会内日本水質汚濁研究会(JAWPR)設立準備委員会
4. シンポジウム時間割

9:30	開会の辞	委員長 左 合 正 雄
9:40	カドミウムによる環境汚染	公衆衛生院 山 県 登
10:40	石油系工場廃水の生物処理	微生物工業技術研 御 園 光 信
12:30	魚貝類の重金属による汚染現況	東京歯科大 上 田 喜 一
13:30	海洋汚染をめぐる国際情勢	公衆衛生院 南 部 特 一

5. 参 加 費 会員 1,500円 非会員 1,800円
6. 申込期限 原則として昭和46年9月25日(土)までとし, 申込用紙(様式随意, 所属学会等ならびに住所・氏名, 明記のこと)または電話にて申込みこと。
7. 申 込 先 (社)日本下水道協会内日本水質汚濁研(問合せ先) 究会(JAWPR)設立準備委員会
東京都千代田区平河町2-4-3 麹町会館
電話 03 (265) 5361 (代表) 内線 367
03 (263) 9539 (直通)

日本地球化学会 ニュース

No. 58

1972. I. 10

総 会 報 告

1971年10月16日, 日本都市センターにおいて, 室住正世氏が議長となり, 会員約100名出席のもとに総会が開催された。

1. 1971年度事業中間報告

1-1 総 会

1971年10月16日, 日本都市センターで開催。

1-2 例 会

○1971年2月13日 東大理・化学教室

(1) 酸素同位体宇宙温度計とイン石の熱史

東大・理 小 沼 直 樹

(2) 含水ケイ酸塩と水との間の水素同位体の分配について

東教大・理 鈴 置 哲 朗

○1971年4月10日 東大理・化学教室

(1) ケイ酸塩の高压下における相転移

東大・物性研 秋 本 俊 一

(2) Anoxic marine environments

Univ. of Washington F.A. Richards

○1971年6月12日 東北大・理・岩鉱教室

(1) 月試料中の微量成分の分析など

東京学芸大 大 沢 真 澄

(2) 親石性と新銅性に関する一考察

東北大・理 齊 藤 一 夫

○1971年12月 東京で開催予定

1-3 討論会

1971年10月15日~10月17日, 日本都市センターで開催(東京教育大・気象研が世話)

課題討論I 地球化学からみた環境汚染

(10月16日)

課題討論II 同位体の挙動からみた火成作用

(10月16日)

1-4 評議員会

(1) 1971年2月13日 東京学士会館本郷分館

4月10日 //

6月12日 東北大学理・地学教室

8月14日 東京学士会館本郷分館

10月15日 日本都市センター

12月11日 東京で開催予定

1-5 ニュースの発行

No. 53 (1971.2.15) (前年度分) No. 54 (1971.4.

25) No. 55 (1971.6.30) No. 56 (1971.8.20)

No. 57 (1971.9.15) No. 58 (年内発行予定)

1-6 名簿の発行

1971年8月に作製, 会員に配布した。

1-7 会誌の発行

Geochemical Journal Vol. 4, No. 2, No. 3 が発

行され, Vol. 4, No. 4 と Vol. 5, No. 1 が年内に

発行予定。地球化学 Vol. 4 が発行された。

1-8 会員数

1971年10月15日現在, 正会員は673名(1971年1

月から10月15日まで, 56名が入会, 16名が退会),

賛助会員は9名(4名が退会)である。

1-9 1972~73年度役員選挙結果

会長: 浜口博, 副会長: 小穴進也

評議員: 梅本春次, 桂敬, 木越邦彦, 北野康, 倉沢

一, 齊藤一夫, 猿橋勝子, 菅原健, 杉浦吉雄, 那

須義和, 中井信之, 西村雅吉, 坂野昇平, 堀部純

男, 本田雅健, 増田彰正, 松井義人, 松尾禎士,

本島公司, 渡辺武男

その他に, 選挙細則第6条〔II〕(2)により,

藤永太一郎

以上の各氏が選出された。

以上事業中間報告が承認された。

2. 1970 年度会計決算報告

ニュース No. 54 に報告したように、決算報告が行なわれ、承認された。

3. 1972 年度事業計画

- 3-1 総会 1972 年 9 月中旬
3-2 討論会 1972 年 9 月中旬に 東北大が世話役となり仙台で開催予定。
3-3 例会 年 4 回
3-4 評議員会 年 6 回
3-5 会誌の発行
Geochemical Journal 4 冊、地球化学 1 冊を発行予定。

3-6 ニュースの発行

年 5 回発行予定
以上事業計画は承認された。

4. 1972 年度予算計画

○ 1971 年度会計中間報告 (別紙) および 1972 年度予算案 (別紙) がまとめられた。

5. 討 論

会員より Geochemical Journal 発行の遅れの原因、遅れの解決法などについて質問が出された。これに対して編集委員会で検討する旨、回答があった。

1971 年度会計中間報告 (1 月 1 日～9 月 27 日)

収 入	円
前年度より繰越	1,302,032
正 会 員 費	1,012,904 (83%)
賛助会員費	110,000
会誌購読料	408,207
別 刷 代	251,970
広 告 代	8,000
銀行利息	11,853
計	3,104,966

支 出	円
会 誌 印 刷	732,220
ニュース印刷	97,500
郵 送 料	133,885
人 件 費	148,000
編 集 費	26,000
会議費・会場費	30,550
講 師 謝 礼	14,000
事 務 費	15,473
旅 費	11,560
銀行等手数料	26,285
別 刷 代	80,755
委員会活動費 (将来計画)	10,000
名簿印刷費	210,000
そ の 他	2,000
計	1,538,228
差引残高	1,566,738

残高内訳 郵便振替 { 東京 191,905
名古屋 97,210

銀行預金	1,253,896
〃	10,000
現 金	13,727
計	1,566,738

1972 年度予算案

収 入	円
前年度より繰越	300,000
正 会 員 費	1,170,000
賛助会員費	200,000
会誌購読料	752,000
別刷超過頁代	500,000
文部省補助金	100,000
広告代その他	150,000
計	3,172,000

支 出	円
会誌印刷費 (年 5 回)	1,700,000
ニュース印刷費 (年 5 回)	100,000
郵 便 料	300,000
人 件 費	350,000
編 集 費 (G.J. 地球化学 ニュース)	60,000
討論会補助金	70,000
委員会活動費	20,000
講 師 謝 礼	20,000
会 議 費	100,000
事 務 費	150,000
銀行等手数料	50,000
予 備 費	252,000
計	3,172,000

お 知 ら せ

1972—73 年度新役員きまる

12 月 11 日の新旧合同評議員会は 役員選出細則第 6 条第 3 項にもとづく評議員を 4 名追加し、また新役員をきめました。

評議員 馬淵久夫、三宅泰雄、杉村行男、鳥居鉄也*

監 事 野口喜三雄*

庶務担当 猿橋勝子、馬淵久夫、杉村行男

会計担当 杉浦吉雄

ニュース担当 倉沢一

編集委員長 木越邦彦

将来計画委員長 増田彰正

財政委員長 鳥居鉄也*

行事委員長 中井信之*

UMP 委員長 本島公司

(* 本人の承諾があり次第決定)

1972 年度地球化学討論会の開催

12 月の評議員会において来年の討論会は 9 月 11～13 日、宮城教育大で開催されることが決められた。課題討論の一つは「有機地球化学研究の技術的問題」で他は未定である。開催日が例年より約 1 カ月早まるため、それにともない申し込みメ切日も例年より早くなりそうである。

第 4 次地球化学将来計画委員会の委員公募

昭和 47 年から、新しい将来計画委員会 (任期 2 年) が発足します。この委員会では、日本地球化学会の会則、評議員会のあり方等も含めて、日本地球化学会のあり方について広く討議することになっています。したがって、日本の地球化学のあり方や教育の問題も議論されることでしょう。委員長には、増田彰正が決定しています。上記のテーマについて意見をお持ちの方は、是非本委員会のメンバーとして積極的に参加していただきたいと思ひます。応募資格については、全く条件がありません。(無論、大学院生でも構いません。) また、非会員でも応募出来ます。地方の方は出席が困難と思われるので、corresponding member になっていただきます。公募委員の数は一応 10 名以下を予定して居りますが、決定は抽選などにより行方予定です。(応募者全員に委員をお願いすることになる可能性が強いと思ひます。) 上記

委員会のメンバーとして参加することに関心をお持ちの方は、「東京都新宿区神楽坂 (☎ 162) 東京理科大学理学部化学科 増田彰正」宛に御連絡下さい。(Tel. (03) 260-4271 内線 338)

第 1 回国際地球化学会議開催される

International Geochemical Congress が 1971 年 7 月 20～25 日モスクワで開かれた。岩漿過程 (87)、熱水過程 (110)、交代作用、変成作用過程 (76)、花崗岩生成の地球化学 (43)、堆積作用過程 (150) (カッコ内は報文数) について行なわれ、日本からは Experiments on hydrothermal process by dynamic method (岩崎、小沢、吉田、実正、小坂、小森) と Sedimentation rate of deep-sea deposits in the North Pacific (三宅、杉村) の 2 篇が出席発表された。

International Symposium on Recent Researches and Applications of Geochemistry

1972 年 1 月 14～20 日インドにおいて上記シンポジウムが開催される。テーマはつぎの通り。

1. Application of Geochemistry to life
2. Geochemistry of rock-alteration and lateritization
3. Geochemical prospecting for hidden deposits
4. Precambrian geochronology
5. General Geochemistry

なお連絡先は Dr. A. K. Prasad, Department of Geology, Patna University, Patna-5, Bihar, India.

地球化学関係の国際的動き

○ 1971 年 8 月水地球化学委員会 (IASH) が開かれ「水質への人類活動の影響を考慮しての水質分析法およびその適用についてのシンポジウム」と「熱水および過熱水の地球化学的シンポジウム」を IUGG ビュローに提案することを決定した。その後のビュロー会議において「熱水のシンポジウム」は次回総会の地下水シンポジウムの中に組み入れることが決定された。

○ 1971 年 8 月 IUGG 総会は Committee of Geochemical Problems の設置をきめた。この委員会は 1) I U

GG内部の地球化学的活動のための連絡, 2) IUGG外部の地球化学機関との連絡, 3) 特にIAGCの将来問題などについて活動する予定である。

(日本学術会議, 地球化学宇宙化学合同委員会委員長(菅原健)の報告書より抜粋)

第9回理工学における同位元素研究発表会

関係諸学・協会との共催で、標記の研究発表会を開催します。会員各位のご応募、ご参加をおねがいたします。

会 期 昭和47年4月13日(木)～15日(土)

会 場 国立教育会館

書 評

Principles of Chemical Sedimentology

Robert A. Berner著, McGraw-Hill Book Company, 1971, 240頁。

この本は所謂“McGraw-Hill International Series in the Earth and Planetary Sciences”の一冊である。バーナー博士によるこの本ほど近頃私を感動させた本はなかった。化学平衡論を地学現象に適用した本はないわけではない(R.M. Garrels and C.L. Christ, Solutions, minerals and Equilibria, Harper & Row, New York, 1965, 450頁; W. Stumm and J. J. Morgan, Aquatic Chemistry, An introduction emphasizing chemical equilibria in natural waters, Wiley-Interscience, 1970, 583頁)。この本は化学平衡論はもちろん化学速度論をも基本的に正確にしかも実にスマートに堆積現象と堆積物に適用している。最近発展した溶液化学の知識がフルに活用されている。その分野の先駆者の1人でもある著者は充分な余裕をもってこの本を書いているようにみうけられる。安心してこの本に頼れることが何よりうれしい。海洋を含めた地球表層の化学の分野における“名著”としての評価をこの本が獲得することは恐らく間違いない。内容は以下の10章からなる。

1. Introduction
2. Review of physical chemistry
3. Ion activities in natural waters
4. Calcium carbonate chemistry in surface waters
5. Evaporite formation
6. Diagenetic processes
7. Diagenetic Redox reactions in the system C-N-S-H-O
8. Diagenesis of Ca-Mg carbonates
9. Formation and alteration of silica and clay minerals
10. Diagenesis of iron minerals.

一読を是非おすすめしたい。(名大理 北野康)

発表申込みは、所定の申込書(1件1通)により行なうことになっています。申込書は下記に請求して下さい。

〒113 東京都文京区本駒込2-28-45

日本アイソトープ協会内

理工学における同位元素研究発表会運営委員会(電話 946-7111)

発表申込み締切: 昭和47年1月31日(月)

講演要旨: 発表申込みがあり次第、所定の原稿用紙が委員会から送られます。

要旨原稿締切: 昭和47年2月29日(火)

Analytical Geochemistry

The Lord Energlyn, L. Brealey 著

426 pp. 142×218 mm Elsevier (1971) 9600円

ElsevierのMethods in Geochemistry and Geophysicsシリーズの5として分析地球化学が出版された。著者らは、英国ノッティンガム大学地質学部に所属しており、英国地球化学界において活躍している。

本書は、化学書や地質学者が岩石や鉱物を分析するために必要とされるマニュアルとして書かれたもので、ことに、学部課程において化学を勉強しなかった地質学者に対して、分析技術を紹介することに主眼点をおいている。

10章に分かれ、序論、第1章、地球化学入門、第2章、定性分析、第3章、定量化学分析、第4章、微量元素の化学分析、第5章、発光分析分析法、第6章、蛍光分析法、第7章、X線分光分析法、第8章、X線回折法、第9章、蛍光分析法、第10章、クロマトグラフ分析法になっている。

著者の一人 The Lord Energlyn は、定性分析のメンブラン比色法の創始者で、地質学的試料に対するこの方法の適用について、かなりくわしく述べている。(気象研 杉村行男)

学会事務所 東京都杉並区高円寺北 4-35-8

気象研究所 地球化学研究部

振替口座 東京 38679

日本地球化学会

ニュース 東京都世田谷区深沢 2-1-1

発行所 東京都立大学理学部化学教室

(編集担当) 半谷高久・石渡良志

日本地球化学会ニュース

No. 60

1972. VI. 1

ご 挨拶

浜 口 博

一昨年末に改正された会則に従って、選挙の結果1972～1973年度の役員が選出され、私が会長の要職をつとめることになりました。前会長三宅泰雄先生はいろいろな面で大変有能な方で、学会の発展に大いに貢献されましたが、私は生まれつき鈍重でかつ世事にうとく、三宅先生のあとを受けつぐのには極めて不適格な人間であります。しかし選ばれてお引受けした以上は鈍馬に鞭打ち誠実をモットーとして評議員の皆様のご援助をいただいて責任を果したいと思っております。学会の運営は会員の皆様を選んだ役員で構成される評議員会を通じて、すべて民主的に行なうことを心がけ、会員の皆様の期待に副いたいと思います。

本会がその前身であった地球化学研究会から日本地球化学会となったのが1963年のことでありますから来年は学会発足10周年になります。発足当時の会員数は約400名でありましたが、以後年を追って、充実の度を加えて1972年4月現在では700名に近くなりました。試みに国際的な地球化学の学会 The Geochemical Societyの会員数を調べてみますと米国人1500名、その他650名(うち日本人70名が含まれる)計2150名であります。これからみるとわが日本地球化学会は学会としては1000名以下の小規模なものではありますが、専門分野の学会としては米国につぐ有力な学会であり、その成果はようや

く世界的にみとめられて一昨年秋には東京で地球化学国際会議をもつに至りました。

ところで地球化学は chemistry と geology との境界領域の学問でありますから化学出身の geochemist と地学出身の chemical geologist との密接な連絡協力が必要であり、この協力を推進してこの分野の学問の発展に寄与することが学会の重要な活動方針の一つであるべきものと思います。しかるに本会は当初の地球化学研究会の発足時代に化学者を主とした学者の集まりであった歴史的な背景があつて、現在でも化学者が多く、地学の会員が少ないようであります。今回の新しい評議員のリストを見ても化学出身者が圧倒的に多く地学出身者は非常に少ないのが目立ちます。これは学会の健全な発展のためにはよくないことで是正されるよう努力する必要があります。このことはしかし役員一同が以前から認めていたことで、本学会が従来日本化学会との結びつきが深く、あたかも日本化学会の一つの division のような観があり、地学関係の学会との連絡が不充分であったことを反省し、学会の独立性を確立するようにと秋の討論会を年会に改めるようになりました。学会の将来としては chemistry にこだわらず進んで earth science の諸分野を包含する日本地球科学会 (Japan Society for earth science) を指向すべきかとも考えます。

215-314

C5W-92

日本地球化学会ニュース

No. 59

1972. III. 31

お知らせ

1972 年 地 球 化 学 討 論 会

共催 日本地球化学会・日本化学会

日 時 9月11日(月)～13日(水)

会 場 宮城教育大学(仙台市荒巻字青葉)

内 容 課題討論および一般討論

- 課題討論 1. 有機地球化学の分析化学的諸問題
(日本分析化学会との共通セッション)
2. 親銅元素の沈殿過程

講演申込締切 5月20日(土)

200字程度の講演内容の概略をつけて、別紙申込書により申し込んで下さい。講演部門はプログラム編成上変更することがあります。講演討論時間は、課題討論は30分以内、一般討論は20分以内です。講演はスライド(35mm)使用に限ります。

講演要旨原稿締切 6月20日(火)

講演要旨原稿は、規定の原稿用紙に黒インクで清書して、下記あてにお送り下さい。要旨の字数は、原則として課題討論2600字、一般討論1200字です。

参加登録費・講演要旨集代

登 録 費 500円(ただし学生は300円)

要旨集代 1200円(予約申込締切日まで)
1700円(締切日以後)

予約申込締切日 6月20日(火)

講演要旨集は、印刷部数を限定しますので、ご入用の方は、講演希望の有無にかかわらず、下記書式でお申し込みの上、ご送金下さい。

総 会 9月12日

懇親会 9月12日(火) 18時から仙台共済会館で行ないます。会費1500円。

エキスカージョン 9月14日(木)～15日(金)

水沢および三陸町見学(アース アンド スペースサイエンス ライン)、緯度観測所、東大宇宙研大気球観測所、東北大理学部地殻変動観測所、気象庁気象ロケット観測所など。費用約5000円(宿泊料を含む)。先着50名

で締切ります。申込締切は6月20日(火)です。

申込書・要旨集原稿・予約金送付先

〒166 東京都杉並区高円寺北4-35-8 気象研究所地球化学研究部 日本地球化学会事務局(電話 03-337-1111, 内線75)

講演および参加申込書書式
(B5判大、このニュース1頁大)

1972年地球化学討論会講演・参加申込書			
受付番号 *		講演番号 *	
申込者氏名			
連絡先		電話	
演 題			
発表者氏名・所属	(氏名にふりがな、講演者に○印をつける)		
講演希望部門		決定部門	*
講演希望時間		決定時間	*
懇親会	出 席	欠 席	
エキスカージョン	参 加	不参加	
送金額	参加登録・要旨集予約 (円) 合計 円		
	懇親会費 (円)		

* は記入しないで下さい。

不要の文字は消して下さい。

Joint Meeting MMIJ-AIME 1972 開催について

日本鉱業会 (MMIJ) と米国鉱山・冶金・石油学会 (AIME) による連合鉱業大会が今年の5月に、東京で開催されます。

場所：東京プリンスホテル (東京都港区芝公園)

日程：5月24日 (水) ～ 27日 (土)

5月24日 (水) 午後 開会式、夜歓迎パーティ

25日 (木) 午前 総合講演、午後 分科研究会

26日 (金) 終日 分科研究会

27日 (土) 終日 分科研究会、夜サヨナラパーティ

分科研究会の主題は下記の通り。

- 1) 斑岩銅鉱床および層状硫化物鉱床の探査
- 2) 石油石炭鉱床の探査
- 3) 石油工学 (油層工学・採油・採ガス・掘さく)
- 4) 露天採掘
- 5) 軟弱な地盤に囲まれた鉱床の探掘
- 6) 近代炭鉱の開発
- 7) 炭鉱の機械化
- 8) 石炭の加工利用
- 9) 複雑硫化鉱の選鉱
- 10) 選鉱・選炭工場の計装化
- 11) 鉱廃水廃煙処理
- 12) 銅・ニッケル製錬の最近の進歩
- 13) 低品位鉱の処理
- 14) 亜鉛製錬の最近の進歩
- 15) バクテリア・リーチング

おもな内容を次に記しておきます。

[GENERAL SESSION]

- * Brief Summary of Exploration for Mineral Deposits in Japan..... C. Nishiwaki
- * Present Status of Japanese Petroleum Production Industry..... H. Yamanouchi
- * Some Geological Criteria Applicable to the Search for Southwestern North American Porphyry Copper Deposits..... S. R. Titley
- * International Mineral Trade: United States versus Japan..... K. P. Wang
- * Recent Mining Technology in Japan..... Y. Shimomura
- * The Coal Mining Industry of Japan..... S. Iki
- * Mining Equipment Trends..... R. M. Stewart
- * Health and Safety Research in the United States..... J. J. Scott
- * Mineral Processing and Coal Preparation Tech-

niques in Japan..... T. Imaizumi

* History of Copper Smelting in Japan.....

M. Kameda

* History and Present State of Environmental Quality Control Techniques in Japanese Mining Industry..... K. Matsumoto

* Mineral Processing and Coal Preparation Techniques in the United States..... E. S. Frohling
E. W. Gieseke, F. M. Lewis

[TECHNICAL SESSION]

EXPLORATION OF PETROLEUM AND COAL DEPOSITS

EXPLORATION OF PORPHYRY COPPER AND STRATIFIED SULFIDE DEPOSITS

* Geology of the Kuroko Deposit..... T. Tatsumi,
Y. Takagi, T. Otagaki

* Mineralogical Characteristics of Kuroko Ores
.....Y. Shimazaki

* Porphyry Coppers vs. Massive Sulfides in Their Global Tectonic Settings..... P. W. Guild

* Geophysical Explorations in the Region of Kuroko Deposit..... K. Sato

* Diamond Drilling Exploration in the Region of Kuroko Deposit..... M. Shinoda

* Geochemical Exploration in the Region of Kuroko Deposit..... M. Shiikawa, N. Tono

* Geophysical Exploration for Porphyry Copper Deposits..... J. S. Sumner

* Geochemical Exploration for Massive Sulphide Deposits in North America..... D. R. Clews,
A. R. Barringer

* Geology and Mineralization of the Atlas-CEBU Disseminated Copper Deposits.....

F. A. Madamba

* Black Mountain..... M. Tangonan

PETROLEUM ENGINEERING I - OIL RESERVOIR ENGINEER ENGINEERING

PETROLEUM ENGINEERING II - WINDING OF OIL AND NATURAL GAS

ENVIRONMENTAL QUALITY CONTROL IN MINING AND METALLURGY

PROCESS CONTROL IN MINERAL PROCESSING AND COAL

BACTERIAL LEACHING

(地調 東野徳夫)

第9回世界石油会議について

1975年5月6日から13日まで、第9回世界石油会議が東京で開かれる予定である。

このことは1971年6月に、モスコで開かれた第8回の会議で決定された。このため、世界石油会議日本国内委員会では、東京大会準備のため“組織委員会”をつくり、1971年10月3～6日、トロントにおける世界石油会議の S. P. C. (Scientific Program Committee) 会議に4名を出席させた。

トロント会議後、組織委員会の下部機構として、企画委員会 (会場・旅行など)、技術委員会 (論文関係担当) の2つができた。技術委員会では、上流、下流、公害の三部門について、外部の学会に全面的に協力を依頼することとなり、上流部門は石油技術協会、下流部門は石油学会・化学工業協会、公害部門は燃料協会があたりことになった。

将来計画委員会からの

お知らせとお願い

2月の評議員会で、将来計画委員会の委員16名が承認されましたが、さらに数名追加の予定ですので、全メンバーが、一応そろってから、氏名を発表させていただきます。

評議員会から、地球化学会主催の研究発表の機会を、春・秋の2回にしてはどうか (化学会年会とは別に)、という案を審議するよう依頼されておりますが、ご意見のある方は、委員長宛にご連絡下さい。また、今度の将来計画委員会への希望や、そこで取り上げるべき問題について、遠慮なくご意見をお寄せいただければ、大変有難く思います。
(委員長 増田彰正)

地球化学と特に関係が深いのは上流部門の石油・天然ガスの起源や鉱床成因論の部分である。第8回のモスコ、第7回のメキシコ、第6回のフランクフルトの各大会の際にも、きわめて高度の論文が提出され、討論されている。

目下石油技術協会の“論文委員会”では、鶴田均二会長を中心にして、上流部門の Review Papers, Panel Discussions の題目に関する日本案の作製を進めている。

日本の組織委員会の案は、3月一杯にロンドンの本部へ届けられる。そして、これが5月中旬にイタリアまたはオーストリアで開かれる S. P. C. 会議にかけられる。

それらの結果については、またこの誌上でお知らせします。
(本島 公司)

ドル払会費・購読料の変更について

対米ドル・レート変更に伴い、ドル払会費・購読料を下記のように変更します。なお、念のため、現行の国内会費・購読料も併記します (G. J. vol. 5 に印刷されている価格は誤りですので、お含みおき下さい)

	国内	在外
正会費	年 2,000 円	年 10 米ドル
公共会費	1 冊 700 円	—
購読料	1 冊 1,080 円	1 冊 4 米ドル

1970 年 IAGC シンポジウム (東京) の

プロシーディングス・リプリントについて

リプリント希望の方は、至急下記に申し込んでください。別刷代は、Geochim. Cosmochim. Acta の場合より高くはないが、全て個人負担ということです。

(菅原 健)

申込先:

Prof. E. Ingerson
Dept. of Geological Sciences
The University of Texas at Austin
Austin, Texas 78712
U. S. A.

新 会 員 (1971. 12. 28~1972. 2. 10)

(氏 名)	(勤 務 先)	(卒業校(年))
B.N.Madson	Lab. of Applied Geophy., Denmark	Aarhus Univ.
田口 雄作	東教大理・院	東教大院修士
寒川 強	工技院公害資源研	静岡大 (1971)
本間 久英	東教大理・院	東教大理 (1968)
野崎 義行	北大水産・院	北大院修士 (1971)
南川 雅男	北大水産在学中	
山田耕一郎	〃 〃	

山田 寧雄 北大水産在学中
長尾 美治 室蘭工大 〃
山脇 正義 〃 〃
大橋 英隆 北大水産 〃

退 会 者
三和 丈人 (71/2/23)
飯田 汲事 (72/1/12)

1971 年 度 会 計 決 算 報 告

(1971 年 1 月 1 日~1971 年 12 月 31 日)

(収 入)	円		円
前年度繰越金	1,302,032	差 引 残 高	1,972,301
正 会 員 会 費	1,323,280	(内 訳)	
賛助会員会費	110,000	銀 行 預 金	1,409,208
会 誌 購 読 料	481,449	〃	10,000
別刷代超過頁代	348,270	郵便振替 (東京)	439,465
刊行補助金 (文部省)	100,000	〃 (名古屋)	100,710
広 告 代	8,000	現 金	12,918
銀 行 利 息	11,853		
計	3,684,884	計	1,972,301

(支 出)	円
会 誌 印 刷 費	732,220
ニュース印刷費	97,500
郵 便 料	167,945
人 件 費	104,928
編 集 費	56,000
討論会補助金	70,000
会場費・会議費	46,020
講 師 謝 礼	18,000
事 務 費	24,410
銀行等手数料	32,385
別 刷 印 刷 代	120,675
委員会活動費 (将来計画委)	10,000
名 簿 印 刷 費	210,000
そ の 他	22,500
計	1,712,583

以上、野口喜三雄監事によって、事実と相違ないことが承認された。また、2月の評議員会において承認された。

学会事務所 (166) 東京都杉並区高円寺北 4-35-8
気象研究所 地球化学研究部
電 話 (03) 337-1111 内線 75
振替口座 東京 3 8 6 7 9
日 本 地 球 化 学 会

ニ ュ ー ス (213) 川崎市高津区久本町 135
発 行 所 地質調査所 地球化学課
電 話 (044) 8 6 - 3 1 7 1
(編集担当) 倉沢 一・本島 公司
(年 5 回発行予定)

日本地球化学会ニュース

No. 60

1972. VI. 1

ご 挨 拶

国立国会
50.1-7.21
図書館

浜 口 博

一昨年末に改正された会則に従って、選挙の結果1972~1973年度の役員が選出され、私が会長の要職をつとめることになりました。前会長三宅泰雄先生はいろいろな面で大変有能な方で、学会の発展に大いに貢献されましたが、私は生まれつき鈍重でかつ世事にうとく、三宅先生のあとを受けつぐのには極めて不適格な人間であります。しかし選ばれてお引受けした以上は鈍馬に鞭打ち誠実をモットーとして評議員の皆様のご援助をいただいて責任を果たしたいと思っております。学会の運営は会員の皆様が選んだ役員で構成される評議員会を通じて、すべて民主的に行なうことを心がけ、会員の皆様の期待に副いたいと思います。

本会がその前身であった地球化学研究会から日本地球化学会となったのが1963年のことでありますから来年は学会発足10周年になります。発足当時の会員数は約400名でありましたが、以後年を追って、充実の度を加えて1972年4月現在では700名に近くなりました。試みに国際的な地球化学の学会 The Geochemical Society の会員数を調べてみますと米国人1500名、その他650名(うち日本人70名が含まれる)計2150名であります。これからみるとわが日本地球化学会は学会としては1000名以下の小規模なものではありますが、専門分野の学会としては米国につぐ有力な学会であり、その成果はようや

く世界的にみとめられて一昨年秋には東京で地球化学国際会議をもつに至りました。

ところで地球化学は chemistry と geology との境界領域の学問でありますから化学出身の geochemist と地学出身の chemical geologist との密接な連絡協力が必要であり、この協力を推進してこの分野の学問の発展に寄与することが学会の重要な活動方針の一つであるべきものと思います。しかるに本会は当初の地球化学研究会の発足時代に化学者を主とした学者の集まりであった歴史的な背景があって、現在でも化学者が多く、地学の会員が少ないようであります。今回の新しい評議員のリストを見ても化学出身者が圧倒的に多く地学出身者は非常に少ないのが目立ちます。これは学会の健全な発展のためにはよくないことで是正されるよう努力する必要があります。このことはしかし役員一同が以前から認めていたことで、本学会が従来日本化学会との結びつきが深く、あたかも日本化学会の一つの division のような観があり、地学関係の学会との連絡が不充分であったことを反省し、学会の独立性を確立するようにと秋の討論会を年会に改めるようになりました。学会の将来としては chemistry にこだわらず進んで earth science の諸分野を包含する日本地球科学会 (Japan Society for earth science) を指向すべきかとも考えます。

—IAGC の最近の活動状況—

- 1968年印刷の「Origin and Distribution of the Elements」99論文, 1178p, Pergamon Press. まだ入手可能。
- 1968年8月に Vienna でもたれた会議のプロシーディングス「Meteorite Research」73論文, 970p. D. Reidel Pub. Co., Dordrecht, Holland. IAGC 会員は40%割引で入手可能。
- 1968年8月, Prague (IGC-IUGS) の「Geochemical and Geophysical Prospecting for Deep-Seated Ore Deposits」の会議のプロシーディングス。33論文の編集をおえ, 1972年夏〜秋に出版。
- 1970年 London での「The Chemistry and Mineralogy of Meteorites and Extraterrestrial Matter」のアブストラクトは, Mr. P. Wilkinson, Dept. of Geology, Univ. of Sheffield-s1 3 JD, England から入手可能。
- 1970年9月Oslo 会議のプロシーディングス「Activation Analysis in Geochemistry and Cosmochemistry」は1971年出版。46論文, 468 p. Universitetsforlaget, Blindern, Oslo 3, Norway 又は Box 142, Boston, Mass. 02113, U. S. A. で扱っている。
- 1970年8月「Geology and Genesis of Precambrian Iron and Manganese Formations and Ore Deposits」の Kiev シンポジウムのプロシーディングスは UNESCO (Paris) で印刷中。1973年初頭完成予定。
- 1970年9月東京の「Biogeochemistry and Hydrogeochemistry」は The Clarke Co., 1054 31st St., N. W., Washington, D. C. 20007, U. S. A. で印刷中。
- 1971年7月, Moscow の「First International Geochemical Congress」の中で, Geochemistry of Geologic Process の主題については, 19ヶ国, 208論文が報告された。プロシーディングスはモスコで出版される。一部の論文は Chemical Geology に発表されている。

シンポジウムの開催

- 「Atmospheric Carbon Dioxide」
 モントリオールでの8月の IGC-IUGS 会合と連合で開催される。コンビーナは Prof. H. E. Suess, Univ. of Calif. at San Diego. 4セッションある。
 1. The carbon dioxide content of the atmosphere. Observational facts.
 2. Distribution of CO₂ between atmosphere and ocean, equilibria and kinetics.

- 3. Geochemical reactions of atmospheric carbon dioxide.
- 4. General models and their mathematical treatment.
- 「Cosmochemistry」
 1972年8月14日〜18日, モントリオール会議の前に Mass. の Smithsonian Astrophysical Lab. で, オルガナイザー A. G. W. Cameron, Yashiva Univ., New York によって開催される。
- 「Geochemistry of Metallogeny」
 1972年11月13日〜17日, オーストリアの Leoben で, コンビーナ W. E. Petrascheck によって開催される。ただし招待論文のみ。
- 「Kimberlites and the Processes of the Upper Mantle」
 1973年9月〜10月南アフリカで, コンビーナ L. H. Ahrens, Dept. of Geochemistry, Univ. of Cape Town, Rondebosch, R.S.A. により開かれる。トピックスは, 年代と同位体研究, 鉱物学, 岩石学, 地球物理学, 地球化学, 構造についてカバーされる。野外巡検も予定されている。

計画中のシンポジウム

- 「Recent Researches and Applications of Geochemistry」
 1972年1月予定のところ延期。コンビーナ Dr. A. K. Prasad, Dept. of Geology, Patna Univ., Patna 5, Bihar, India へ連絡すれば, 情報がえられる。
- 「Geology, Mineralogy and Geochemistry of Carbonatites」
 1973年, ブラジルで, コンビーナ Prof. J. H. Grossi-Sad, Escola de Engenharia, Univ. Federal de Minas Gerais, Belo Horizonte. M. G., Brazil により開催される。トピックスは, Synthesis of the world occurrence of carbonatites with comparative study; Review of basic characteristics, classification and nomenclature; Finitization; Experimental studies; Economic geology and prospecting 野外巡検も計画されている。
- 「Chemical Investigations of Natural Waters」
 1973年または1974年にカナダでもたれる予定。1971年モスコで出されたもので, コンビーナ未定。
- 「Carbon Balance in the Geochemical Cycle」
 コンビーナ Dr. Keith Kvenvolden, NASA-Ames Research Center 239-9, Moffett Field, Calif. 94035. モントリオール会議の後にスケジュール決定。

「地化将委新聞」の発行にあたって

第四次将来計画委員会が, これまでの委員会を一応引き継いだ形で発足することになりました。第三次委員会の活動目標は, (1)地球化学教育機関の充実(講座増), (2)共同利用研究所設立の推進, (3)日本地球化学会のあり方, 以上の三つでした。(1)の目的のため, アンケートが行なわれ, 各大学における地球化学教育の実情と, 講座増要求の現状が明らかになりました。(2)については, あまり活動が行なわれず, (3)については, 討議の時間はさらに少なかったといえるでしょう。以上の目標と関連して, 「公害と地球化学」についての議論は, かなり活発に行なわれました。

第三次委員会からの引き継ぎ事項として, 上記の(3)のテーマについて検討して欲しいということであり, また, (1)のこともお忘れなく, との要望がありました。このような前期委員会からの要望もふまえて, 新委員会は新たな目標あるいは問題を発掘することになるでしょう。しかし, この委員会に何ができるのでしょうか。どの程度のことができるのでしょうか。過去の将来計画委員会がかなりの努力を払ったにもかかわらず, その成果が豊かなものでなかったことを見れば, 答は自ずから明らかであります。会員の多数がこのような委員会の存在意義を認めているかどうか, という疑問もないわけではありませんが, ここでは一応, 存在意義があると考えること

にしたいと思います。

しかし, このような委員会が, 会員と全く遊離しては存在し得ません。また, 委員会の議論が委員会の中だけで閉じてしまうことも残念なことだと思います。委員会と会員との間に, インパクトとレスポンスがあって始めて, 委員会は模索しながらも進むことができ, 長い目で見て, 多少は日本地球化学会の発展に寄与できるのではないかと思います。この度のささやかな新聞の発行が, 上に述べたような方向に少しでも役立つ媒体となるよう願っている次第です。

第四次将来計画委員会の委員は次の通りにきまりました。

荒牧 重雄	倉沢 一	半谷 高久
石渡 良志	桑本 融	坂野 昇平
一國 雅巳	佐藤 和郎	藤井 直之
大崎 進	佐藤 壮郎	増田 彰正*
小嶋 稔	鈴木 昌	松久 幸敬
小沼 直樹	田中 重男	本村 碩敏
桂 敬	野津 憲治	綿拔 邦彦
加藤喜久雄	浜砂 武聖	(*委員長)

上記委員は, 出席の容易さという点を重視した結果, その大多数が東京またはその周辺の在住者になっております。出席が容易でない若干名の方には, 通信メンバーとして参加していただくことにしました。

“島弧の火山活動” シンポジウム (1973)

日ソ火山学研究者の間で, 研究成果及び研究計画に関する情報交換を促進する第一歩として, 1973年に東京で島弧の火山活動なる問題について, 日ソ間でシンポジウムを行ないたい旨の申込みが, ソ連邦地物研連の Prof. Beloussov から, 日本の地物研連委員長の永田教授へ文書で来ているそうです(3月22日付)。永田委員長は, Prof. Beloussov 宛, 日本政府がこのための予算措置をするよう努力する旨, 返事を出した。文部省の予算措置が確定したら, GDP の一環として, 上記シンポジウムを持つことができることになる。(地物研連火山分科からの情報)

関連学会カレンダー

6月6日〜8日	： 鉱物学会 (上野・国立科学博物館)
6月21日〜23日	： 質量分析学会 (仙台・宮城教育大)
8月26日〜9月7日	： 第2回国際結晶学会議 (国立京都国際会館)
9月27日〜29日	： 鉱物学会・鉱山地質学会・岩鉱学会 (連合学会) 秋季連合学術講演会 (北大)
10月8日〜10日	： 日本鉱業会大会 (熊本大)
10月11日〜12日	： X線分析討論会 (名古屋市・中京大)
10月11日〜14日	： 日本化学会第27秋季年会・化学関係学 協会連合研究発表会合同大会 (中京大)
10月末日	： 火山学会秋季大会 (東京の予定)

GDP の最近の動きから

GDP 小委員会世話人会が4月12日午後1時30分から、学術会議で開かれ、次のようなことが報告された。

- この8月にカナダのモントリオールで開かれる IU-GS の会議で、GDP の国際委員会がある。小委員長の力武氏が出席予定。政府から旅費は出ない。
- JOIDES (アメリカの深海ボーリング計画) 会議に在米中の上田、村内両氏出席。この計画を国際計画としたいが、たとえ費用分担の大部分をアメリカが持つにしても、日本は3億円/年で、GDP に入れることは無理。
- GDP の47年度は、総研(班長奈須)としてスタート。2,000万円つくもよう。
- 48年の予算要求案では、従来出されたものと大きな変更はない。新規に直接参加はむずかしいだろう。

「現代の地球観」講習会のお知らせ

日本物理学会主催、関係諸学、協会協賛で標記の講習会が開催されます。聴講希望者は、日本物理学会に至急お申し込み下さい。

期日：7月26日(水)～7月28日(金)

会場：科学技術館ホール(東京都千代田区代官町)

内容：地球序説、宇宙・月・地球、地球の内部、地球の磁気、実験室の中の地球、海洋底の物理、孤状列島、プレートテクトニクスと海の火山、新しい地震観、地震の予知。

聴講料 協賛会員7,000円。(学生5,000円)

テキスト1部無料配布

定員 400名(先着順)

聴講申込

申込受付開始 5月22日(月)午前9時より。

申込先 日本物理学会

〒105 東京都港区芝公園3-5-8

機械振興会館211号室

申込書様式(B6版用紙適宜)

以下の項目を記入して聴講料をそえて提出して下さい。

氏名、連絡先(詳細に)、勤務先、聴講料協賛会員7,000円(学生5,000円)、送金合計額、送金方法。

送金月日：入金月日(項目だけ設け記入しないこと)

新会員(1972. 2. 21～4. 10)

(氏名)	(勤務先・存学)	(卒業校(年))
城戸勝利	北大水産・院	
鈴木励子	東北大教養化学	
手塚 瞳	学習院大理・院	学習院大院修士
古谷征男	栃木県公害研	宇都宮工短大(1965)

退会者

大原 英一 (72/2/21)

山口久之助 (72/3/15)

本多 純夫 (72/3/29)

あ い さ つ

前号から新しくニュース編集担当が変りました。東京都立大の半谷高久、石渡良志両氏は永い間編集の労をとられ、ご苦労様でした。石渡氏と引継事務を行ない、以後ニュース発行を続けておりますが、会員の皆様からのホットニュースのご寄稿をお願い申し上げます。

(編集担当)

学会事務所 (166) 東京都杉並区高円寺北4-35-8
 気象研究所 地球化学研究部
 電話 (03) 337-1111 内線 75
 振替口座 東京 38679
 日本地球化学会

ニュース発行所 (213) 川崎市高津区久本135
 地質調査所 地球化学課
 電話 (044) 86-3171
 (編集担当) 倉沢 一・本島 公司
 (年5回発行予定)

日本地球化学会ニュース

No. 61

1972. VII. 1

— 学会プログラム特集号 —

1972年度 地球化学討論会

主催 日本地球化学会・日本化学会
 会期 1972年9月11日(月)～9月13日(水)
 会場 宮城教育大学(仙台市荒巻字青葉) 電話 (0222) 22-1021

日 程 表

日 \ 時	9:00		9:30		12:30		12:50		13:30		13:50		15:30		17:00		17:50		18:00	
11 日 (月)	受	一 般 討 論				A B C	休	課 題 討 論 II A				一 般 討 論 B				評議員会 (宮教大内)				
12 日 (火)		一 般 討 論						A B C	一 般 討 論				A B C	特 別 講 演 及 び 総 会 A				懇 親 会 (仙 台 共 済 会 館)		
13 日 (水)	付	一 般 討 論				A B	憩		課 題 討 論 I A					一 般 討 論 B						
14 (木) ~15 (金)		エキスカッション (水沢および三陸町見学)																		

第1日 9月11日(月)

A会場

—(9:30～12:50)—

座長 兼 島 清

11A01 鉄質沈殿物中の微量成分

(都立大) 荒木 匡

11A02 水溶液中のアルミニウムのイオン種と溶解度の温度変化

(神奈川温研) 鈴木孝雄, 平野富雄, 大木靖衛

11A03 炭酸カルシウム沈殿と液相間の少量および微量元素の分配定数—銅, 亜鉛の共存系について

(名大理水研) 北野 康, 寺尾 宏

11A04 炭酸カルシウムによるフッ素の共沈殿を規定す

る因子

(名大理水研) 奥村 稔, 北野 康

座長 神 谷 宏

11A05 石灰岩の生成過程における元素の移動

(琉球大理工, 名大理水研*) 渡久山章, 北野 康*, 兼島 清

11A06 石灰質生物殻の Aragonite の Calcite への変質について

(名大理水研) 北野 康, 金森暢子,

吉岡小夜子

11A07 CaMg (SiO₃)₂ 結晶およびガラスと酸溶液との反応 [Pyroxene の構造と反応]

(東理工大) 実政 勲, 桂 敬

- 11A08 天然水中の水和酸化鉄(III)および酸化鉄(III)の
化学的性質(そのII)
(名大理水研) °古川征弘, 金森 悟, 北野 康
総合討論(課題討論IIとのつながり)
座長 北 野 康

—(13:50~17:50)—

- 課題討論 II「親銅元素の沈殿過程」
コンビーナー・座長 一國雅巳, 重松恒信, 北野 康
- 11A09 溶液内における親銅元素の反応性
(東工大・工) 大滝仁志
- 11A10 重晶石による鉛の沈殿過程
(東大教養) °高野穆一郎, 綿抜邦彦
- 11A11 温泉水および温泉沈積物の Zn, Pb, Cd, Cu の
挙動
(千葉大理) °中川良三, 大八木義彦
- 11A12 アパタイトに対する親銅元素の固一溶液相間の
分配
(京大化研) 重松恒信, 藤野 治, °松井正和
- 11A13 琉球諸島に産する石灰岩およびその関連物質中
の銅, 亜鉛, マンガンおよびストロンチウムの
含有量
(琉球大・理工) °兼島 清, 平良初男, 渡久山章
- 11A14 硫化鉱物結晶の生成環境による性状の差異
(京北大・工) 鈴木光郎

B 会 場

—(9:30~12:50)—

- 座長 那 須 義 和
- 11B01 泥炭地地下水に溶存するガス組成
(地調) °米谷 宏, 永田松三, 粕 武,
大場信雄
- 11B02 湖水における酸化還元過程にともなうシリカの
動き
(名大理水研) 加藤喜久雄
- 11B03 富岩運河の水質汚濁
(富山工専) °布村啓一, 寺田龍郎
- 11B04 松尾イオウ鉱山地域における強酸性水の水質の
挙動について
(岩大・教育) 後藤達夫

- 座長 後 藤 達 夫
- 11B05 豊平川水系における水質の変化と鉱山活動との
関係について
(北大工) 那須義和
- 11B06 草津湯川水系の人工中和(第1報)
(東工大工, 上智大理工*)
°小坂丈予, 野村昭之助*, 小坂知子*, 与芝憲一*
- 11B07 富山県西部丘陵地における陸水の水質
(富山県立短大) 高倉盛安
- 11B08 新幹線六甲神戸トンネル坑内湧水の水質につ
いて
(地調) °望月常一, 黒田和男, 小尾五明,
坂巻幸雄
- 11B09 水質からみた亀の瀬地すべり地帯の粘土鉱物生
産量の推定
(京大防災研) °吉岡竜馬, 奥田節夫

—(13:50~17:50)—

- 座長 小 坂 丈 予
- 11B10 炭田地域における坑内水の地球化学的研究
(地調) °永田松三, 佐々木実, 西村富士
- 11B11 塩水化地下水地帯の帯水層の鉱物・塩基交換性
と地下水の化学組成
(地調, 理大*) °池田喜代治, 斉藤政勝*
- 座長 角 皆 静 男
- 11B12 炭酸ガス・水間の同位体分離係数と空気中の酸
素の同位体組成について
(東大海洋研) 堀部純男, °重原好次, 高桑康榮
- 11B13 両極氷雪中の降塵量
(室蘭工大, 北大低温研*) °室住正世,
中村精次, 新名朋次, 清水 弘*
- 11B14 一連の降雪における化学成分の変化
(北大水産) °中谷 周, 西村雅吉
- 座長 杉 村 行 勇
- 11B15 連続降雨中の化学成分濃度変化とその原因につ
いて
(成蹊小) 竹内丑雄
- 11B16 Pb-210 降下量と大陸起源エアロゾルの輸送に
ついて
(北大水産) °福田一義, 角皆静男
- 11B17 Rn-222 の娘核種による成層圏エアロゾルの降
下量の推定
(北大水産) °福田一義, 角皆静男
- 11B18 大気中の二酸化イオウの酸化速度
(北大水産) °角皆静男, 中村慎一, 平山雅照

C 会 場

—(9:30~12:50)—

- 座長 岩 崎 文 嗣
- 11C01 火山ガスのハロゲン含有量の変動について
(愛知教大) °杉浦 孜, 松村公慶, 井串清行
- 11C02 火山ガスと火山岩の反応によるフッ素, 塩素の
分別に関する模型実験
(東工大理) 吉田 絵
- 11C03 火山ガスおよび火山昇華物中の重金属元素
(名大理) °浜砂武聖, 水谷義彦, 小穴進也
- 座長 小 沢 竹 二 郎
- 11C04 酸素分圧の低い雰囲気中での溶融火山岩からの
アルカリ金属の揮発—実験方法の検討—
(秋田大地下資源研) 岩崎文嗣
- 11C05 1971年8月 霧島火山 手洗温泉付近の小爆発の
ときの噴出物
(鹿大理, 熊大理*) °鎌田政明, 松本幡郎*
- 11C06 硫酸イオン—水間の酸素同位体分別を利用する
地熱水の地下温度推定
(名大理) 水谷義彦
- 座長 鎌 田 政 明
- 11C07 イエローストン国立公園の温泉の化学成分とそ
の地球化学的意義(第1報)
(東邦大, 岩大*) °野口喜三雄, 後藤達夫*,
相川嘉正
- 11C08 エチオピア・ダロール地区の2つの興味ある温
泉
(九大温研) °古賀昭人, 野口徹郎
- 11C09 玉川温泉のシリカ含有量
(東邦大理) °岩崎岩次, 吉池雄蔵, 岡村 忍

第2日 9月12日(火)

A 会 場

—(9:30~12:30)—

- 座長 杉 浦 吉 雄
- 12A01 東京都における建造物の元素別スタンディング
マスの推定
(都立大理) °半谷高久, 安部喜也, 松本源喜
- 12A02 太平洋東部海域の表面海水と大気中の炭酸ガス
分圧の分布
(気象研) °杉村行勇, 猿橋勝子, 三宅泰雄
- 12A03 表面海水の Pb-210 と陸起源エアロゾルの降下
機構

- (北大水産) °野崎義行, 角皆静男
- 12A04 海洋表層水中における懸濁粒子の平均寿命
(東教大理) 松本英二
- 座長 岡 部 史 郎
- 12A05 海洋におけるケイ酸の溶出速度
(北大水産) °城戸勝利, 西村雅吉
- 12A06 富士川河口域における海水中的鉄の分布特性
(気象研) 杉浦吉雄, °鈴木正基, 桜井澄子
- 12A07 紀伊水道海域の Si, Al の分布
(京大理) 藤永太郎, °桑本 融, 中山英一郎,
興津 博, 増沢敏行
- 12A08 海水中的のヒ素, アンチモンについて
(近畿大, 京大化研*) °合田四郎, 平山宏,
西川泰治, 重松恒信*

—(13:30~15:30)—

- 座長 西 村 雅 吉
- 12A09 南北太平洋における臭素の分布(白鳳丸 KH68
—4 南十字星航海)
(東海大海洋) °豊田恵聖, 岡部史郎
- 12A10 海水中のセレンについて(そのII)
(近畿大, 京大化研*) °由井 収, 平木敬三
合田四郎, 西川泰治, 重松恒信*
- 12A11 東京湾と駿河湾の海水および海底土のパナシウ
ム
(東海大海洋) °岡部史郎, 佐藤義夫, 鈴木正弘
- 座長 桑 本 融
- 12A12 海水中のイットリウムについて
(近畿大, 京大化研*) °平木敬三, 中川和実,
合田四郎, 西川泰治, 重松恒信*
- 12A13 evaporite 生成機構の実験的観察
(地調) °藤貫 正, 五十嵐俊雄

B 会 場

—(9:30~12:30)—

- 座長 藤 貫 正
- 12B01 堆積岩の堆積環境と指示元素(IV), 北海道夕張
地区堆積岩のフッ素含量
(群大工) 赤岩英夫, 田島榮作, °相沢省一
- 12B02 堆積岩のハロゲン元素とその挙動(VI), 沖縄本
島南部の海成新第三紀泥岩のハロゲン元素含量
(群大工, 地調*) °田島榮作, 赤岩英夫,
本島公司*

- 12B03 堆積岩のハロゲン元素とその挙動(VII), 沖縄本島南部の海成新第三紀泥岩のヨウ素に関する地球化学的考察
(地調, 群大工)* °本島公司, 赤岩英夫*, 田島栄作*
座長 赤 岩 英 夫
- 12B04 石狩炭田, 空知地区における第三系泥質岩の化学組成
(地調)* °粕 武, 横田節哉
- 12B05 中国地方の頁岩および粘板岩の化学組成
(香川大教) 稲積章生
座長 松 尾 禎 士
- 12B06 伊豆箱根および隠岐島後の火山岩系列の希土類元素含有量の変化と鉱物・石基間の分配係数
(学習院大理 NASA/GSFC) 長沢 宏
- 12B07 かんらん石と斜方輝石との間の Fe-Mg の交換分配平衡
(岡大温研, 名大理)* °松井義人, 西沢 修*
- 12B08 かんらん石と斜方輝石との間の Mn-Mg の交換分配平衡
(名大理, 岡大温研)* °西沢 修, 松井義人*
—(12:30 ~ 15:30)—
座長 松 井 義 人
- 12B09 Allende 隕石の異なった構成体中の微量元素存在度について
(地調*, 理大**, スミソニアン博物館)
°田中 剛*, 増田彰正**, B. MASON
- 12B10 コンドライト中の希土類元素の存在度
(理大, 理)* °中村 昇, 増田彰正
- 12B11 中 止
座長 増 田 彰 正
- 12B12 中 止
- 12B13 地球の炭素の同位体組成
(名大理)* °小穴進也, 和田秀樹
- 12B14 サマリウムの放射性壊変を用いる年代測定
(東大理)* °野津憲治, 馬淵久夫, 吉岡 修, 松田准一, 小嶋 絵

- C 会 場
—(9:30 ~ 12:30)—
座長 吉 田 絵
- 12C01 玉川温泉地帯の水の鉄含有量
(東邦大理) 岩崎岩次, 吉池雄蔵, °安田清江
- 11C02 熊本県杖立温泉の成因
(九大温研, 九大理*) 古賀昭人, °野田徹郎, 樽谷俊和*
- 12C03 万座温泉地域の水質とその由来について
(上智大理工, 東工大*) 野村昭之助, 小坂知子, 小坂丈予*, 平林順一*
- 12C04 箱根火山の温泉のマグネシウム含量について
(その1) 基盤岩類の温泉
(神奈川温研)* °平野富雄, 大木靖衛
座長 古 賀 昭 人
- 12C05 南紀温泉群の泉質と地質との関係
(中央温研) 佐藤幸二
- 12C06 宮城県鳴子温泉の銅, 亜鉛含量について
(東北学院大)* °渡辺淳夫, 鈴木幸喜
- 12C07 同位体比からみた箱根火山の水の挙動
(東教大理, 神奈川温研*) °松尾禎士, 日下部 実, 平野満里子, 平野富雄*, 大木靖衛*
- 12C08 化学成分および同位体組成よりみた温泉水の挙動
(名大理) 中井信之
—(13:30 ~ 15:30)—
座長 中 井 信 之
- 12C09 登別温泉における硫黄同位体組成
(室蘭工大) 安孫子 勤
- 12C10 酸性温泉地域における変質岩中のアルミニウム
(東邦大) 今橋正征
- 12C11 酸性溶液における微斜長石の分解
(名工大, 東邦大*) °神谷 宏, 尾崎敦子, 功刀正仁, 今橋正征*
- 座長 石 渡 良 志
- 12C12 日光湯ノ湖における有機窒素, 有機炭素の分布と収支
(東教大理) 森 和紀
- 12C13 琵琶湖湖底柱状堆積物の炭素と窒素
(名大水研, 京大理*) °小山忠四郎, 堀江正治*
- 12C14 琵琶湖湖底堆積物の有機物に関する研究
(名大水研, 京大理*) °半田暢彦, 堀江正治*

- 第3日 9月13日(水)
A 会 場
—(9:30 ~ 12:30)—
座長 牧 真 一
- 13A01 湖底堆積物の脂肪酸に関する研究
(名大水研)* °松田ひろみ, 半田暢彦, 小山忠四郎
- 13A02 湖底堆積物中のステロイドに関する研究
(名大水研)* °西村弥重, 小山忠四郎
- 13A03 沿岸水中の溶存有機物の分解
(都立大理) °小倉紀雄
- 13A04 堆積物中に含まれるステロールの分解について
(都立大理) 小椋和子
座長 田 口 一 雄
- 13A05 中ノ海, 宍道湖と尾駿湖での堆積物(有機物と炭酸塩)の炭素安定同位体の挙動について
(東大海洋研, 名大理)* °石塚明男, 中井信之*
- 13A06 油田新第三系に含まれる非蛋白質構成アミノ酸の堆積学的意義
(東北大理) 佐々木清隆
- 13A07 本邦産原油類の炭素同位体組成について
(地調) 安藤直行
- 13A08 宮崎・島根両県下の新第三系堆積岩の炭化水素類について
(地調)* °牧 真一, 永田松三

- (13:30 ~ 17:00)—
課題討論 I 「有機地球化学的分析化学的諸問題」
コンピーナー・座長 斉藤一夫, 佐々木慎一, 半田暢彦
- 13A09 微量有機試料の構造決定
(宮教大) 佐々木慎一
- 13A10 古生物研究者側からのコメント
(金沢大*, 東北大) 小西健二*, 高柳洋吉, 新妻信明
- 13A11 化学化石にまつわる諸問題
(北大理) 秋山雅彦
- 13A12 地球化学試料中の炭水化物の分析
(名大水研) 半田暢彦
- 13A13 ガスクロマトグラフィー質量分析による水中有機物質および堆積物中の有機物の分析
(都立大理) 石渡良志

- B 会 場
—(9:30 ~ 12:30)—
座長 倉 沢 一
- 13B01 Iceland における火山岩 (Neovolcanics) 中の希土類元素の存在度
(理大理)* °下川利成, 増田彰正
- 13B02 超塩基性岩中の U, Th, Pb および Pb 同位体比
(学習院大理)* °森岡正名, 木越邦彦, 長沢 宏
- 13B03 岩漿分化過程にみられる酸素同位体分別について
(地調*, 岡大温研)* °松久幸敬*, 松葉谷治, 酒井 均
- 13B04 かんらん石, さくろ石, 磁鉄鉱などの酸素同位体比について
(岡大温研, 地調*) °松葉谷治, 松久幸敬*
座長 酒 井 均
- 13B05 柳井地方領家帯の花崗岩化作用における酸素同位体の挙動
(岡大温研) 本間弘次
- 13B06 静岡県大崩海岸の枕状溶岩に伴う炭酸塩鉱物の $\delta^{18}\text{O}$ と $\delta^{13}\text{C}$ について
(名大理)* °和田秀樹, 小穴進也
- 13B07 $\text{CO}_2(\text{g})-\text{H}_2\text{O}(\text{g})$ 系の酸素同位体交換反応による微量の水の $^{18}\text{O}/^{16}\text{O}$ 比測定法
(気象大, 東教大*) 鈴置哲朗, °伊藤妙子*
- 13B08 インド・デカン高原玄武岩類のストロンチウム同位体組成
(地調) 倉 沢 一
—(13:30 ~ 17:00)—
座長 長 沢 宏
- 13B09 海底火山岩の K-Ar 年代
(東大理, 東大地震研*) °小嶋 絵, 座主繁男, 斉藤和男, 荒牧重雄*
- 13B10 火成岩のイオウ含量
(東工大, 日女大*, 東邦大**)* °小沢竹二郎, 永嶋 茂, 吉田 絵, 蟻川芳子*, 岩崎岩次**
- 13B11 岩石, 堆積物中のセレン, オスミウムの放射化分析法と JG-1, JB-1 標準岩石試料中の含量
(金沢大理)* °寺田喜久雄, 寺嶋 健, 木羽敏泰
- 13B12 標準岩石試料 JG-1, JB-1 の化学成分と JA-1 の発行について
(地調)* °安藤 厚, 倉 沢 一, 竹田栄蔵, 大森貞子

715-314

日本地球化学会ニュース

No. 62

1972. XI. 10

1972年度総会報告

1972年9月12日、宮城教育大学において、西村雅吉氏が議長となり、会員約100名出席のもとに総会が開催された。

1. 1972年度事業中間報告

1-1 総会

1972年9月12日、宮城教育大学で開催

1-2 例会

○ 1972年2月19日 東大理、化学教室

- (1) 親銅元素の行動 東大理 浜口 博
- (2) 微量元素の生物地球化学ならびに分析化学的諸問題 東大農 不破敬一郎
- (3) 沿岸水域の富栄養化について 名大理 西条 八束
- (4) 東京湾の汚染物質の生物地球化学的研究 東大海洋研 堀部 純男

○ 1972年6月10日

- (1) アポロ月試料の化学組成 東大理 脇田 宏
- (2) コンドライト中の希土類元素の存在度 東理大 中村 昇

○ 1972年12月 京都で開催予定

1-3 講演会

1972年11月18日東京・本郷赤門学士会館
米國加州大 E. D. GOLDBERG

1-4 討論会(年会)

1972年9月11日～13日 宮城教育大学で開催(東北大学が世話14日～15日エクスカッション)

課題討論 I (9月13日)

「有機地球化学の分析化学的諸問題」
(日本分析化学会との共通セッション)

課題討論 II (9月11日)

「親銅元素の沈殿過程」

1-5 評議員会

1972年2月19日 東京学士会館本郷分館
4月15日 〃
6月10日 東京大学好仁会
9月11日 宮城教育大学会議室
12月 京都で開催予定

1-6 ニュースの発行

No. 58 (1972. 1. 10 前年度分), No. 59 (1972. 3. 31), No. 60 (1972. 6. 1), No. 61 (1972. 7. 1), No. 62, 63 (年内発行予定)

1-7 会誌の発行

Geochemical Journal. Vol. 4 No. 4, Vol. 5, No. 1, 2, 3, 4, Vol. 6, No. 1, および、地球化学 Vol. 5が発行された。

1-8 会員数

1972年9月11日現在、正会員704、(1972年1月から9月11日まで、入会29、退会6)、賛助会員は、15(入会7、退会1)である。

1-9 学協会の共催等

1972年4月 第9回理工学における同位元素研究発表会(東京)

1972年4月 国際分析化学会(京都)

1972年7月 日本物理学会「現代の地球観」講習会(東京)

以上、事業中間報告が行なわれた。

2. 1972年度会計中間報告

別紙のように報告された。

3. 1971年度会計決算報告

ニュース No. 59に報告したように決算報告が行なわれ、承認された。

討論会世話人連絡先

〒980 仙台市 東北大学理学部化学教室

斎藤 一 夫

(電話 0222-27-6200, ただし7月23日以降
0222-22-1800)

交通 ●仙台駅下車。駅前の大通り(青葉通)を500m

ほど行った左側の市バス11番乗場から「宮教大行」に乗車。終点で下車(バス所要時間15分)。バスはラッシュ時は10分間隔、日中は20～30分間隔で運行(9月から増便の予定)。

●このほか市バス10番乗場から工学部経由「動物公園行」に乗車し、青葉山グラウンドで下車し、歩いてよい(バス15分、徒歩7分)。

●タクシーでは駅から約400円。

Meetingのお知らせ

地化将来計画委員会主催で、下記の会合がもたれます。ふるってご参加ください。出席できない方でも、文面でご意見をいただければ幸いです。お気軽にどうぞ。

テーマ 「地球化学の将来に夢はあるか」

とき 9月10日(日) 18:30～21:00

ところ 仙台市国分町3-3

宮城県民会館3階中ホール

会費 200円(予定)

(地化将委新聞をご参照ください)

学会事務所 (166) 東京都杉並区高円寺北4-35-8
気象研究所 地球化学研究部
電話 (03) 337-1111 内線 75
振替口座 東京 38679
日本地球化学会

ニュース (213) 川崎市高津区久本135
発行所 地質調査所 地球化学課
電話 (044) 86-3171
(編集担当) 倉沢 一・本島 公司
(年5回発行予定)

座長 安藤 厚

13B13 鉱床の鉛の同位体比の地域的変化

(東大地震研) 佐藤和郎

13B14 FeS₂-PbS-H₂O系におけるイオウ同位体の分配について

(名大理) 清棲保弘, 中井信之

13B15 キースラーガーの黄鉄鉱中のCoの分布

(地調) 伊藤司郎

13B16 秋田県上向鉱床の岩石中の微量成分と鉱床との関連性について

(地調) 東野徳夫

13B17 地球化学データの数値処理

(秋田大, 聖霊高*) 椎川 誠, 若狭喜作*

特別講演 9月12日(火) 15:30～16:30

座長 田中 信行

12A特 Prof. L. W. Strock (MIT):

“Résumé of the Terrestrial Geochemistry of V. M. Goldschmidt”

総会 9月12日(火)

特別講演終了後直ちに同じ会場で開催します。

懇親会 9月12日(火) 18時から

仙台共済会館, 会費1,500円で行ないます。

エキスカッション

9月14日(木)～15日(金)

水沢および三陸町見学, (アースアンドスペースサイエンスライン) 水沢緯度観測所, 東大宇航研大気球観測所, 東北大理学部地殻変動観測所, 気象庁気象ロケット観測所など。

費用約5,000円(宿泊料を含む)

参加登録費・講演要旨集代

登録費 500円(学生300円)

要旨集代 1,700円

4. 1973 年度事業計画

- 4-1 総会, 1973 年 10 月初旬
 4-2 討論会, 1973 年 10 月初旬に, 秋田大学が世話役となり, 秋田で開催予定
 4-3 例会 年 4 回
 4-4 評議員会, 年 6 回
 4-5 会誌の発行 Geochemical Journal, 4 冊, 地球化

学 1 冊を発行予定

- 4-6 ニュースの発行 年 5 回発行予定
 4-7 会員名簿の発行, 8 月に予定
 4-8 次期役員選挙 (1974—75 年度)
 以上事業計画が承認された。

5. 1973 年度予算計画

下記のように, 1973 年度予算案がみとめられた。

日本地球化学会 1972 年度会計中間報告および

1973 年度会計予算案

1972 年 9 月 11 日評議員会において, 下記の通り承認
 されました。

1972 年度会計中間報告		
(1972. 8. 31 現在)		
(収入)	(72 年度予算案)	
	円	円
前年度より繰越	1,972,301	300,000
正 会 員 費	647,974	1,170,000
賛 助 会 費	80,000	200,000
会 誌 購 読 料	1,032,772	752,000
別 刷 代	813,593	500,000
広 告 代	24,000	150,000
利 息	10,163	
刊 行 補 助 金		100,000
合 計	4,580,803	3,172,000
(支出)		
会 誌 印 刷	2,324,871	1,700,000
ニ ュ ー ス 印 刷	75,000	100,000
郵 送 料	267,685	300,000
人 件 費	180,290	350,000
編 集 費	20,000	60,000
討論会補助金	70,000	70,000
委員会活動費	—	20,000
会場・会議費	47,072	100,000
講 師 謝 礼	12,000	20,000
事 務 費	158,245	150,000
銀行等手数料	21,825	50,000
その他(同位元素発表会 討論会委へ)	27,900	予備費 252,000
合 計	3,204,888	3,172,000
差引残高	1,375,915	

内 訳		差引残高 1,375,915 円
銀 行 預 金	633,539 円	
郵 便 振 替	621,320	
現 金	121,056	
合 計	1,375,915	
1973 年度 予 算 案		
(1972. 9. 11)		
(収入)	前年度より繰越	620 千円
	正 会 員 費	1,200
	賛 助 会 費	200
	会 誌 購 読 料	950
	別 刷 代	800
	刊 行 補 助 金	100
	広 告 代	150
合 計		4,020
(支出)	会誌印刷費 (6 回)	2,400 千円
	ニ ュ ー ス 印 刷 費	120
	郵 送 料	350
	人 件 費	350
	編 集 費	60
	討論会補助金	70
	委員会活動費	20
	講 師 謝 礼	20
	会場・会議費	100
	事 務 費	150
	名 簿 代	230
	銀行等手数料	50
	予 備 費	100
		4,020

日本における GDP

(国際ジオダイナミックス計画)

日本地球化学会がわが国の GDP と公式に接触を持ったのは 1971 年 4 月のことであった。この月に日本学術会議は国際 GDP へのわが国の正式参加を政府に勧告し, あわせて学術会議国際地球観測特別委員会 UMP 部会の下に GDP 小委員会を発足させることにした。国際地球観測特別委員会は地球化学会に小委メンバーのすいせんを依頼し, 筆者が指名された。GDP 小委の第 1 回会合は 71 年 5 月 28 日に開かれた。

しかし, わが国の GDP のマスタープランの作成は, この時すでに事実上完了していたのである。そもそも IUGG と IUGS が ICSU (International Council of Scientific Unions, 日本での対応機関は学術会議) に対して GDP のアピールを出したのは 1968 年 9 月にさかのぼり, ついで国際 GDP 委員会 (ICG) が ICSU の承認を得たのは 1970 年 10 月であった。わが国の GDP 計画策定はこのころすでに開始されていたものとみられ, 公式には UMP 部会の下に GDP 準備小委員会, 非公式には関係各研究者間の連絡によって, 計画案が積み上げられていた。

GDP は, UMP の成果と反省をふまえて提案され, UMP とことなつて各テーマごとに専門分野にまたがる研究チームを編成することが要請されていた。わが国のマスタープランは, ICG が提案した 12 のトピックのうちから, 地理的位置と研究者の関心の大勢から判断して, 6 種のトピックを重点的にとりあげ, それをつぎの 3 本の柱にまとめあげたものである (テーマの番号と名称は 1972 年 5 月の改訂版計画書におけるもの)

- I. 西太平洋海底の動きと構造の解明
 - II. 島弧ならびにその周辺部の地質学的, 地球物理的研究——過去から現在にいたる地球内部運動の変遷の解明
 - III. マントル対流に関する基礎的研究
- この各テーマはそれぞれ 3 ないし 9 種のサブテーマないしトピックに分けられ, それがさらに細分されて実行されることになっている。(サブテーマの段階ですでに discipline 別の色彩が濃く, 全体の総合と調整によって interdisciplinary の実をあげ得るか否かは日本の GDP がかかえる未解決の問題である)

日本地球化学会としての GDP への参加が上記のように決定的に立ちおくれた結果, マスタープランの作成は地球物理学と地質学の立場から行なわれ, 地球化学は独自の discipline としてのサブテーマを設置することが

できなかった。そこで, 1971 年 6 月 21 日の GDP 小委での GDP 研究計画および概算要求額の決定にあたっては, 地球化学系の研究者から出された研究計画は上記の細分化された多数のわくの中にばらばらに挿入される形となった。こうしてできた計画書 (47 ページ) は 1971 年 7 月に仮印刷された。はじめの意図では, この計画書を測地学審議会が採択して政府に建議した上, 昭和 47 年度から 6 年間の特別事業として予算化されるはずであったが, 時間的に間にあわず, 特別事業として政府の認めるところとならなかった。そこでとりあえず昭和 47 年度は準備期間とし, UMP の初年度と同様に文部省科学研究費の総合研究を申請した。この総研は代表者に奈須紀幸氏 (東大海洋研) があたり, 2,000 万円が交付された。この科研費は上記計画書に記載された各研究者の手許に少額ずつ配分されている。

この 1971 年版計画書には予算折衝上の弱点があったので, 昭和 48 年度の概算要求用に手なおしが行なわれた。この改訂版計画書 (91 ページ) は 72 年 5 月に仮印刷された。この改訂作業 (72 年 2-4 月) の際に, 旧計画書作成時に概算要求を出し忘れていたり, 要求は出しながらその事実が GDP 小委に知られないままになっていたために計画書に記載もれになっていた研究計画をどのように扱うかが当然問題となった。しかし, 計画全体が大規模で, かつ由来も古いので, 特例的な新規くり入れは全体に大きな不満を招くであろうとの判断から, 緯度観測所の事業計画のくり入れを例外的特例として, あとは無視する結論になった。(このような計画の硬さは学術研究計画として本来望ましいものとは思えないし, 特に地球化学のように独自のわくを持たない分野では身動きがつかなくて困ったことである。この点の解決も今後に残されている) 改訂された計画は 6 月 9 日の測地学審議会の議を経て政府に建議され, 昭和 48 年度からはじまる 5 年間の特別事業として予算化される見込みとなった。

GDP 実施機関の大半を管理する立場にある文部省の要請によって, “GDP 計画実施世話人会” なるものが, 本来学術会議に属する GDP 小委とは別に, 作られることになった。この会は少なくとも 2 カ月に 1 回集まり, 計画の進行状況をチェックすることになっている。

1972 年から学術会議が第 9 期に入ったのに伴い, 国際地球観測特別委員会のあり方が, 第 61 回総会で審議された。その結果この委員会は改組の上存続することになった。すなわち, 第 9 期国際地球観測特別委員会はこれまでと異なり部会を置かず, そのかわりに 3 つの分科会 (STP, GDP, GARP) で構成される。第 1 回委員

会は72年9月22日に成立し、委員長永田武(東大理)、幹事(ex officio)に鈴木次郎(東北大理・学術会議)と八木健三(北大理・学術会議)、庶務幹事に福島直(東大理)の各氏を選出した。これに伴い、UMP部会は自然消滅し、GDP小委もこれと同時に消滅したことになる。従来はUMP部会GDP小委が対外的に日本のGDPのNational Committeeとして存在したが、今後GDP分科会がこの任にあたることになる。GDP分科会はその下に、はじめに書いた3本の柱と、国際協力の4つの小委員会を設置することになっている。

国際地球観測特別委員会 GDP分科会のメンバーはつぎの通り(敬称略、*印はGDP実施世話人会メンバー)。力武常次*(分科会主任、東大震研)、小林和男*(分科会幹事、東大海洋研)、鈴木次郎*、秋本俊一*(東大物性研)、浅田敏*(東大理)、猪木幸男*(地調)、黒田吉益*(東教大理)、松井義人*(岡山大温研)、村内必典*(科学博物館)、奈須紀幸*(東大海洋研)、安井正*(気象大学校)、永田武、川上喜代志(水路部長)、井上英二(国土地理院)、八木健三(北大理)、藤田至則(東教大理)、今井一郎(気象研所長)、菱田耕造(気象庁)、柳原一夫(気象庁)(松井義人記)

昭和48年度東京大学海洋研究所 共同利用研究の公募について

1. 応募資格

国、公、私立大学その他の研究機関の研究者ならびにこれに準ずる者で、海洋の基礎的研究を目的とするもの

2. 共同利用研究の種別(申込・連絡期限)

(1) 研究船の利用研究(申込期限11月30日)

(A) 白鳳丸運航計画

海 域	期 間	日数	主な分野
本 州 南 方	5.14~6.7	25	物 理
西 太 平 洋 (GDP)	7.5~9.25	83	地物・地質
九 州 西 方	11.21~12.18	28	水 産
北太平洋西部	49年 1.18~3.22	64	物 理
亜熱帯海域			

(B) 淡青丸、主に近海の研究航海に就航

(C) 申込書類

(i) 研究船利用申込書 1

(ii) 承諾書 1

(i) 略歴書

1

(2) 外来研究員(連絡期限11月30日)

所外の研究者が海洋研に滞在して研究を行なう便宜を提供することを目的とする。あらかじめ、関係の深いと考えられる部門の担当者と連絡し、研究テーマ、滞在予定期間、必要経費、その他希望事項について打合わせて下さい。

(3) 研究会の開催(連絡期限11月30日)

比較的多人数の1・2日間のシンポジウム、または比較的小人数の研究者による数日間の討論集会などが考えられている。関連部門の担当者と連絡し、研究会の名称、提案理由、開催希望月日、参加予定者数、その他希望事項について打合わせて下さい。

3. 申込期限

(1) 研究船利用 昭和47年11月30日

(2) 研究会ならび外来研究員

(i) 連絡期限 昭和47年11月30日

(ii) 申込期限 昭和47年12月28日

4. 申込先 〒164 東京都中野区南台1-15-1

東京大学海洋研究所共同利用掛

TEL. 東京 (03)-376-1251

各書類は、海洋研究所所定のものを使用のため、必要部数を請求して下さい。

5. 採否の決定 昭和48年2月上旬

来 年 の 学 会 予 告

- 1973年度地球化学討論会は1973年秋、秋田大学で行なわれます。
- 1973年4月3日~5日、地質学会が東北大学で開催されます。
- 1973年度秋季火山学会は鹿児島県の予定です。

学会事務所 (166) 東京都杉並区高円寺北4-35-8
気象研究所 地球化学研究部
電話 (03) 337-1111 内線 75
振替口座 東京 38679
日 本 地 球 化 学 会

ニ ュ ー ス (213) 川崎市高津区久本135
発 行 所 地質調査所 地球化学課
電話 (044) 86-3171
(編集担当) 倉沢 一・本島 公司
(年5回発行予定)

日本地球化学会 ニュース

No. 63

1973. I. 15

1973年地球化学討論会の予定

場所 秋田大学

世話人連絡先 〒010 秋田市手形学園町1-1

期日 昭和48年10月1日(月)~3日(水)

秋田大学教育学部地学教室

内容 課題討論、一般討論、(エクスカッションあり)

椎川 誠

課題討論 1. 黒鉱鉱床の地球化学

電話 0188-33-5261

2. 有機性鉱床の地球化学

詳細は4月頃配布予定の本誌でお知らせ致します。

招待講演のみ

1972年地球化学討論会報告

昭47. 12. 9

斎藤一夫、一国雅巳

日時 昭和47年9月11日(月)~13日(水)

場所 仙台市宮城教育大学 3会場

出席 延約700人(分析化学会との共通セッションを含む)

登録 222名(内学生42名)

講演 110件

課題討論 1. 有機地球化学の分析化学的諸問題
(日本分析化学会との共通セッション)
講演5件

2. 親銅元素の沈殿過程 講演6件

懇親会 9月12日(火) 仙台共済会館

出席者 102名

(会費1500円)

遠足 9月14, 15日 水沢市および三陸町

参加人員 22名

決 算

収入 485,300円

内訳 { 登 録 料 102,600円
要 旨 代 302,700円
学 会 より 80,000円

支出 476,800円
内訳 { 印 刷 費 170,000円
通 信 費 45,000円
会 場 費 60,000円
人 件 費 90,000円
文 具 代 20,000円
準 備 費 85,000円
雑 費 6,800円
差引残 8,500円
(次期開催地に申し送り)

「生物性炭酸塩殻の生成」に関する シンポジウムの報告

昨1972年12月11~13日の3日間、東京大学海洋研究所施設共同利用研究会「生物性炭酸殻の生成に関するシンポジウム」(海洋無機化学部門 坪田博行教授)が開かれた。

生体内における炭酸塩の生成、礁の生成、炭酸塩堆積物とその変質、とそれぞれの段階における生物、地質、化学の各分野の諸問題が取り上げられ、活発な討論が展開された。

生物性炭酸塩については、各分野との境界領域を埋めていく必要があり、今回の研究会は北野康教授(名大)